

「頑張れ」より「頑張ったね」のほうが・・

5月25日（月）

生徒たちは意欲的に授業に取り組んでいますが、時々授業を見ていて気になることがあります。それは、成績が伸び悩んでいる生徒の中にマイナスの言葉を使っている生徒が多いということです。「私は記憶力が悪いからどうせ覚えられへんし」、「勉強は嫌い」、「やりたくない」、「なんで数学なんか勉強せんとあかんねん」など、これらの言葉は日常会話に自然と盛り込まれていきます。このような発言をする生徒は、マイナス発言が長年の口癖になってしまっているため、「文句を言わずにやりなさい！」と



か、「頑張りなさい！」といった精神論的な励ましの言葉をかけても、なかなか変わることはありません。そして怖いことに、「繰り返された言葉はそのとおりに実現される」とことが多いため、そのような言葉を発する生徒は学力も身につけにくくなっているのではないのでしょうか。 言霊「ことだま」

こんな心理実験があります。Aさんがある日、会社に出社したとき、同僚のBさんから「Aさん、今日顔色悪いけど大丈夫？」と言われました。Aさんは「別に体調悪くないけど」と答えます。次に、Cさんが別の場所でAさんに「Aさん今日、体調悪そうだけど大丈夫？」と声をかけます。Aさんは先ほどBさんから似たようなことを言われたので、もしかしたら自分は調子が悪いのかと思い、「そう見える？そういうえば、体調はよくないかもしれないね」と答えます。この後も何人かが同じような声かけをするとAさんは本当に会社を早退してしまいます。例えば、「私は数学が苦手だ！」といつも発言していたら、いつしか数学が苦手な人物のように振る舞うようになり、やがて数学から遠ざかるような行動を起こします。たとえ勉強しているように見えても、心が拒絶しているので、ただの時間の浪費になってしまいます。言葉は行動を駆り立てる非常に強力なツールであり、いい方向で使っていれば大きな効果を発揮しますが、悪い方向へ使ってしまうと、悲劇を生んでしまいます。人の心や体を傷つけたり、反社会的な行動をした場合は、叱らなければならない場合もあります。しかし、普段は子どもを元気にさせる言葉や勇気を与える言葉をかけるようにしましょう。では、どのような言葉がけが良いのでしょうか。「他者と比較して評価しない」、「前より進歩した点、上達した点を評価する（「頑張れ」）より「頑張ったね」、「自信を持たせるために評価する」などの言葉がけが大切だと思います。